

新津記念館所蔵 藤田嗣治《千人針》《佐渡小木港》について

澤田 佳三

1937年（昭和12）の第24回二科展に出品された藤田嗣治の《千人針》は、その後所在が不明とされ、当時残された図版がその存在を示す役割を果たしてきた。だが、それは紙面上の存在のみに帰してはいなかった。《佐渡小木港》という藤田が同年に描いた別の油彩画とともに、現存していることが確認されたのである。以下は、この2点の油彩画に関する報告である。

「新津コレクション展」と『新津コレクション集』

2008年（平成20）に新潟市内の百貨店旧新潟大和7階（その後、同店は2010年に閉店）で開催された「新津コレクション展」（会期：10月8日～14日／主催：新潟日报社、財団法人新津記念館）において、大正から昭和初期にかけて石油業で財を築いた新津恒吉（1870～1939）が収集した美術品約60点が、新津記念館の他の所蔵品とともに同館以外で初公開された。そして、本展に合わせて同館の主要なコレクションを取めた『新潟が生んだ日本の石油王 新津恒吉 新津コレクション集』（財団法人新津記念館、2008年。以下、『新津コレクション集』と表記）が刊行された（図1）。本文で取り上げる藤田嗣治の油彩画2点はこの展覧会に出品され、同書にカラー図版で掲載された（図2）（図3）。ここでは「©Kimiyo Foujita & SPDA, Tokyo, 2008」というクレジットが付されている。

筆者は、後に同書を通してこの2作品の所在を知るところとなるが、現在にいたるまで作品を実見する機会を得ていない。ただし、新津記念館への照会により作品の所在自体に変わらないことは確認したものの、それらの入手の経緯をはじめとした当時の様子を示す資料は同館には残存しないようであり、不明な点が多い。しかし、1938年（昭和13）の建物の完成時には2点とも館内に飾られていたという関係者の記憶もある。そうしたことから、本文では作品そのものの調査によらず周辺の資料をたどることによって、2作品をめぐる当時の状況を探ることにしたい。

新津恒吉と新津記念館

新津恒吉（図4）は、新潟県三島郡出雲崎町出身で、明治半ばに同地で製油業をはじめた後、中蒲原郡新津町（現新潟市秋葉区）に工場を移転。大正期に経営の安定と拡大を図り、昭和に入ると刈羽郡西中通村（現柏崎市）や新潟市内、さらには秋田県内にも工場を新設して石油事業を大きく飛躍させ一代で財を成した実業家である。1938年には新津石油株式会社を設立するが、同社はその後合併し、現在の昭和シェル石油株式会社の前身の一



図1 『新津コレクション集』

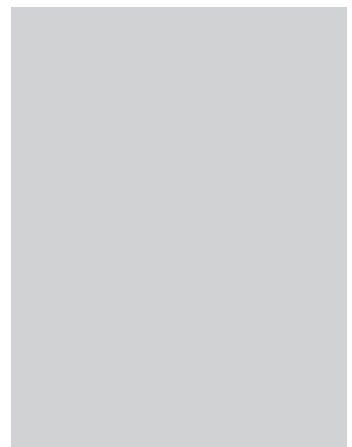


図2 藤田嗣治《千人針》1937年 油彩・カンヴァス 144.0×110.0cm 公益財団法人新津記念館所蔵（出典：『新津コレクション集』）

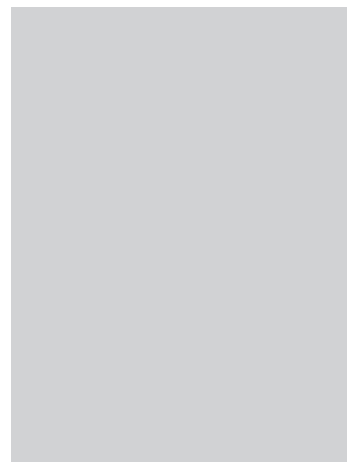


図3 藤田嗣治《佐渡小木港》1937年 油彩・カンヴァス 57.0×42.0cm 公益財団法人新津記念館所蔵（出典：『新津コレクション集』）

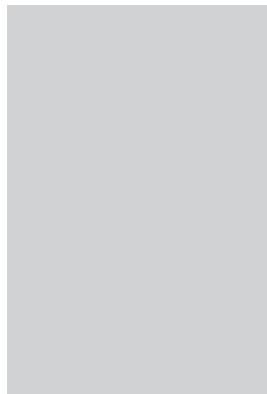


図4 新津恒吉の肖像写真（出典：『新津コレクション集』）

つとなる。

1928年(昭和3)には邸宅を新潟市内に新築し、自身初の居宅を持つことになるが、その新潟市の公会堂は新津恒吉の多額の寄付金によって建設され1938年に竣工した。公会堂は、鉄筋コンクリート造り3階建てで、大ホールと四つの集会室があり、収容人数は2000人の建造物として、1994年(平成6)までの半世紀以上、市民の文化活動の拠点として親しまれた^(註1)。新潟市は、新津の行為に対し彼の銅像を公会堂の竣工に合わせて建物の前庭に設置した。銅像の制作者は、南蒲原郡中之島村(現長岡市)出身の彫刻家武石弘三郎である。この像は、戦時下に金属回収で供出され、その後別に保存されていた碑文も1955年(昭和30)の新潟大火で市役所とともに焼失してしまった。火災後は、公会堂が市役所の仮庁舎となるが、新庁舎の完成により再び公会堂として使用されることとなり、銅像も復元されることになった。そこで武石が再び制作にあたり、1958年(昭和33)に復元された銅像が公会堂前に設置された。それから時を経て公会堂は取り壊されるが、跡地には新たに新潟市民芸術文化会館が1998年(平成10)に竣工し、銅像もまた会館の一階正面に移転されて現在に伝わる^(註2)(図5)。



図5 新津恒吉像

さて、新潟市公会堂が竣工した同じ1938年には、新津恒吉にとってもう一つの大きな出来事があった。それは、自宅の敷地内に2年余りの工期を要した洋館の完成だった。現在の新津記念館となるこの洋館は、取引先の外国人を招くための迎賓館として建設され、鉄筋コンクリート造り3階建て、床面積は延べ約636平方メートルで、現在の新潟市中央区旭町通1番町の高台の角地に建ち、重厚な塀越しに建物の上部が見える(図6)。建物の内部は、1階にジャコビアン様式の客間「イギリスの間」、2階にルイ16世様式の客間「フランスの間」、3階にロジ風の展望室「ドイツの間」などがあり、2階には京風の和室も備えられている。いずれの部屋も表情の異なる凝らした内装が施され、家具などの調度は輸入品であった。



図6 新津記念館外観

この洋館は、第2次大戦後に進駐軍に接収され、当初は師団長の公舎に使用されたが、やがて下級将校たちのたまり場となり「ニイツ・ハウス」と呼ばれた。1955年に新津家に返還された時には、内装はよごれ調度品の多くは失われていた。その後、財団法人新津記念館が設立され、本格的な改修が行われて1992年(平成4)からは新津記念館の名称で所蔵する美術品とともに一般に公開されている。なお、1998年には新潟県内初の国の登録有形文化財となっている^(註3)。

ところで、新津恒吉は、洋館が完成した翌年に69歳で世を去ってしまう。そして、その三回忌に合わせるように編まれた彼の伝記には、完成後の洋館の内部の様子が描写されており貴重だ。

(註1)

『新・新潟歴史双書3 石油王国・新潟』新潟市、2008年、92-93頁。

(註2)

『新潟歴史双書4 白山公園あたり』新潟市、2000年、124頁。

(註3)

新津記念館に関する記述は、主に『新潟歴史双書6 新潟市の文化財』(新潟市、2002年)を参照した。

一階広間は華やかなスペイン風、ポーチはイタリヤ古典式、客間はコントロールピースの上に飾られてある王冠が象徴するやうに英国宮殿風の豪華のものである。正面に従軍画家三国久氏の杭州湾上陸の油絵、左に四十号のイタリヤ名画が掲げられてゐる。

この客間を出て突き当りの一室が事務室となつてゐて壁面に藤田嗣治画伯の「佐渡小木港」の油絵があり、之は翁が青年時代の思ひ出として特に掲げたものさうである。森靈峰氏刻むところの階段に華麗なる彫刻美を見、ステンドグラスの彩色が美しい投影をする柔かい絨氈を踏みしめて二階へ上れば、廊下には藤田嗣治画伯の名作「千人針」、和田英作画伯の「富士」、石井柏亭画伯の「池畔秋色」の大作がずらりと並んでゐる。

(註4) (傍点は引用者)

(註4)

渡邊進編纂『新津恒吉翁伝』新津石油株式会社、1941年、195頁。

このように、藤田の2点の油彩画は、先の関係者の記憶どおり当初より館内に飾られていたことになる。この中に登場するイタリヤ絵画を除く油彩画は、いずれも『新津コレクション集』に掲載されている。以下、作品名や制作年は同書に基づくが、和田英作の《富士の図》が1931年(昭和6)であるのを除けば、すべて1937年の制作であり、そこからこれらは1938年5月の洋館の完成に合わせてように入手されたものと考えるのが妥当だろう。佐渡出身の従軍画家だった三国久の《敵前上陸》は、1937年11月の日本軍の杭州湾上陸作戦を描いたものだが、それが洋館の1階客間のマントルピースの正面に飾られるというのは、いかにも時世を見るようだ。なお、新津恒吉の伝記における関係者の追憶には、彼には書画骨董以外に興味らしきものはなく、所有の品を愛着を持って楽しんでいたとある(註5)。

(註5)

同前、290頁、294-298頁。

新潟県内における藤田嗣治の個展

新津記念館が所有する藤田嗣治の2点の油彩画が制作された1937年には、新潟県内における藤田の個展が判明しているもので3度開催されている。まずは、「藤田嗣治日本画個人展」が、新潟市内の旧新潟新聞社3階で11月19日から21日の3日間開催された。11月20日付けの『新潟新聞』では、「本社三階の催し」「藤田画伯邦画展 初冬の人気を独占」との見出しで、会場内の写真とともに個展初日の様子を伝えている。出品点数は約50点で、衆目を引いた画題として仏国美人、けしと双猫、富嶽に桜、木蓮と犬、唐獅子などをあげている。そして、最終日を告げる11月21日付けの同紙の記事「本社三階の催し 嗣治画伯個展 日本画展けふ終る」では、入場者が記録破りの多数にのぼったことから、日曜日となる最終日は多くの観覧者が見込まれると予想。さらに、今後開催される藤田の洋画展を告知する。なお、同紙では展覧会の直前から藤田の「日本画私観」という文章を出品作品の写真も添えて連載している。

さらに、この日本画展と入れ替わるように11月23日付けの夕刊からは藤田の「素描とその生命」という文章の連載を開始し、次の洋画展の告知記事と広告が連日のように続く。その洋画展は、同じく旧新潟新聞社3階を会場に、11月30日と12月1日の2日間開催された「藤田嗣治先生油絵個展」である。重要なのは、これらの告知の中で何より大きく扱われたのが、この年の二科展の出品作《千人針》と《一九〇〇年》の特別出品であった。《一九〇〇年》は11月27日付け夕刊の藤田の連載の中で、《千人針》は翌28日

付け夕刊の告知記事において、図版入りで紹介されている。なお、同紙では《一九〇〇年》を《一九〇〇年時代》と表記している。その他に、この個展に出品された18点の作品名についても記事の中で紹介しており、その筆頭が《佐渡小木港》であった。

さらに、この個展については、《一九〇〇年》を現在所蔵する公益財団法人平野政吉美術財団の学芸課長原田久美子氏から貴重な出品目録の写しを提供していただいた。それによれば、新聞記事と同様に出品目録には《佐渡小木港》をはじめとする18点が記載され、さらに特別出品として先の2点が区分けして記載されている^(註6)。また、18点にはそれぞれの号数とともに価格も付されており、作品によってはその作品名の上に○印、△印、レ点などが手書きで書き加えられている。目録の冒頭にはやはり書き手は不明だが手書きで○印が売約済みであることが示されており、○印は《佐渡小木港》をはじめとして、価格が記載されていない《千人針》にまで書き入れられている。なお、《一九〇〇年》にはレ点が付されていることから、それらとは別の扱いだったことが想像される。また、新聞記事ではこの個展の開催趣旨が藤田による売上金の大部分の国防献金にあるとしている。その他、11月26日付けの記事では藤田が新潟に来港するとの記述が見られるが、現時点では確認できていない。

最後の個展は、長岡市内の旧北越新報社3階を会場に12月18日から20日まで開催された「藤田嗣治個人展」である。この個展についても、同様に原田氏から『北越新報』の貴重な記事と広告の資料を提供していただき、内容が明らかとなった。同紙12月17日付け夕刊の記事「藤田画伯の洋画・日本画 五十余点を本社に陳列」によれば、当初は日本画だけの出品であったところ、藤田の強い希望で自身が選んだ「会心の作」洋画10数点が日本画とともに送られてきたために、日本画と洋画による構成となった。しかし、会場の都合で80号や100号といった大作は陳列不可能なために、手頃な作品を選んで陳列するほかなくとしながら、先の新潟の個展では非常な成績を収め県銃後会へ金1000円を寄付して感激させたとある。

翌18日付けの同紙の記事「新たな美の世界 今日藤田画伯の個展 洋画、日本画六十点陳列」では、日本画45点、洋画15点の作品名とサイズが列記されている。ここでは洋画だけに焦点を当てるが、旧新潟新聞社で開催された油絵個展に出品された特別出品をのぞく18点の内、15点がそのまま出品されている。出品されなかったのは、《佐渡小木港》《大島の娘》《富士》の3点だが、出品された15点の中には先の油絵個展の出品目録に手書きされた○印や△印とレ点が付された作品も含まれており、出品の選択においては売約となったものが除かれたとは一概にはいえないようだ。また、会場の都合上出品できなかった80号や100号といった大作も会場に送られてきたと受け取れることから、その中には二科展の出品作が含まれていた可能性も否定できない。《千人針》(144.0×110.0cm)と《一九〇〇年》(144.0×110.5cm)は同一サイズで、号数では80号Fにあたる。ただし、《佐渡小木港》が新潟の個展止まりだったことを考えると、《千人針》も同様に新潟の個展後に新たな所有者の手元にわたったと考える方が自然だろう。原田氏によれば、《一九〇〇年》は同年12月26日に秋田の資産家で蒐集家の平野政吉に譲渡されたとあり^(註7)、この作品については新潟の個展後ではなく長岡の個展を経由して秋田にわたったと考える方が時間的な整合性がとれるように思うが確証はない。

(註6)

「藤田嗣治先生油絵個展」[出品目録]

1. 佐渡小木港 (12号)、2. 仏国ノルマンデー村 (8号)、3. 房州太海、夏の漁村 (10号)、4. 牛堀の宿 (6号)、5. 巴里城外 (6号)、6. 房州太海海岸 (8号)、7. 甲州よりの富嶽 (8号)、8. 秋田の姉妹 (8号)、9. 親子猫 (8号)、10. まゆ玉 (10号)、11. 大島の娘 (6号)、12. 呉、二級峡 (4号)、13. 富士 (6号)、14. 北仏の港 (6号)、15. 佐渡、相川 (8号)、16. 牛堀千歳屋 (6号)、17. 巴里モンマルト テルトン広場 (8号)、18. 眠れる子猫 (3号) / [特別出品]千人針(本年度二科会展出品画)、一九〇〇年時代 (右同)

(註7)

原田久美子「藤田嗣治と万国博覧会」『壁画《秋田の行事》からのメッセージ 藤田嗣治の1930年代』展図録、秋田県立美術館、公益財団法人平野政吉美術財団、2013年、102頁。

《千人針》

《千人針》は、既述のとおり1937年9月2日から東京府美術館を会場にはじまった第24回二科展に《一九〇〇年》とともに出品された。画面右下には、「昭和十二年八月 千人針 嗣治 Foujita 1937」との書き込みが認められる。そのおよそ2か月前の7月7日に日中戦争の発端となった盧溝橋事件が発生すると、街頭や駅前などで兵士たちの帰還を願って女性たちが並んで一針の協力を請う姿が全国に広まった。この「千人針」をテーマとした作品を藤田は8月に完成させて出品したことになる。

洋画家渡辺浩三の展覧会評「二科会を見る」では、「この非常時局がどんな風に作品の上に反映して居るか、かなり興味を持って居たのであるが、会場を一巡して見て、作品そのもの、上には何等影響のない事が観取された。之は事変発生以前に製作にとりかいたもの、多い事にも起因するであらう」^(註8)とあるように、それは何より展覧会が事変直後だったことによるが、唯一、藤田の《千人針》がその例外だった。

『日本美術年鑑』での評言どおり、「『千人針』は画材と独自の観察とで目だつ作品であつた」ようだ^(註9)。「場中の傑作で、構図はスケッチ的な動勢を捉へて描写は適確であり、技術的に洗練されてゐる」^(註10)と高く評価するものもあれば、対照的に、「失敗である。新聞の写真にでもある街頭風景の一部分に過ぎず、構図に於いて絵画的な考慮が不足してゐるし絵も薄つべらである」^(註11)、(森口多里)「別にあれで祖国愛などから描いたものとは思へませんね。一種の外国人の眼で見た日本風俗画ですよ」^(註12)といったように評価は大きく分かれたが、良い意味でも悪い意味でも注目された点では変わらない。いずれにせよ、「持ち前の勘のよさ、機敏な着想、類の少ない達者な技巧が、こういう作品を成就させた。世評には、軽薄に時流に媚びてるように言うのもあったが、素早い変わり身でこういう制作を果たしたのは、藤田ならではの拳と言うしかない」^(註13)とすべきだろう。

なお、藤田にはもう1点の《千人針》が存在する。福富太郎コレクション資料室所蔵の同じ1937年制作の油彩画の小品(16.0×21.5cm)で、近年出版された藤田の画集に図版が掲載されている^(註14)。

約1年後の1938年秋には、藤田は海軍の依頼を受けて中国大陸にわたり戦地を取材、帰国後に自身初の作戦記録画の制作に取りかかる。それが、《南昌飛行場の焼打》(1938～39年)と《武漢進撃》(1938～40年)という2点の作戦記録画で、現在は東京国立近代美術館に保管される。その後、藤田は敗戦の1945年(昭和20)まで数多くの戦争画を描き、戦争画家として名を馳せることになるのはよく知られるとおりだ。つまり、1937年の二科展に出品された《千人針》は、林洋子氏がいうように「藤田が初めて手がけた戦争関連の表象」であり、翌1938年の二科展に出品した《島の訣別(那覇)》という沖縄からの出征をテーマとした時局画とともに「彼は戦場ではなく銃後の生活を描くところから『戦争表象』に自発的に乗り出していった」のだった^(註15)。このように、《千人針》は、藤田の戦時期の画業を振り返る時、重要な位置に立つ作品として特別な意味を持つことになる。

なお、先の渡辺浩三の展覧会評には、「この作品には、売約の場合は全額献金と註がしてあつた」^(註16)ということから、先に触れた旧新潟新聞社の油絵個展では、出品目

(註8)
渡辺浩三「二科会を見る」『美術』第12巻第10号、1937年10月、6頁。

(註9)
『日本美術年鑑 昭和13年版』美術研究所、1938年、15頁。

(註10)
同前、83頁。

(註11)
中山巍「二科展評」『みづゑ』第392号、1937年10月、381頁。

(註12)
青野季吉、荒城季夫、一氏義良ほか「座談会 事変と美術」『美術時代』第1巻2号、1937年11月、99頁。

(註13)
瀧梯三「二科七十年史 物語編」『二科七十年史』(戦前編 1914-1943)、二科会、1985年、193-194頁。

(註14)
林洋子監修『藤田嗣治画集 異郷』小学館、2014年、59頁。

(註15)
林洋子『藤田嗣治 作品をひらく』名古屋大学出版会、2008年、394-396頁。

(註16)
前掲、註8。

録には価格の記載はなかったものの、場合によると会場では同様の扱いがなされていたのかもしれない。

《佐渡小木港》

1935年(昭和10)7月に、藤田はフランス人男性とともに日本海側の各地を旅行している。その様子は、藤田の「裏日本」という随筆に残されている^(註17)。真の日本を知りたいというその男性の強い願いを受け入れて、藤田はそれまで気の進まなかった裏日本にはじめて足を踏み入れることになる。二人は、軽井沢で落ち合い出発。長野、新潟の直江津から佐渡島へわたり、本土の新潟へ、それから秋田、男鹿半島、十和田湖、そして青森まで足を延ばして帰京。列車と船によるこの10日間の旅路によって、藤田は裏日本が好きになったと記している。

さて、故藤田君代夫人のもとに残された遺品で、2010年(平成22)に東京藝術大学に一括寄贈された約6000件の「藤田嗣治資料」が、5年間の整理作業の一区切りとして同学大学美術館で公開展示された(会期:2015年12月1日～6日)。この資料は、日記をはじめ、手稿・書簡、藤田が撮影した写真・映像などを含む貴重な一次資料であり、今後の藤田をめぐる研究の進展に多に資するものとして大きな期待が寄せられている。この公開展示を機に、筆者は同館の古田亮准教授の配慮により、本文に関係すると思われる一部の資料について閲覧の機会をいただいた。以下では、この藤田嗣治資料と藤田の「裏日本」との照らし合わせを中心に、《佐渡小木港》について確認してきたい。

はじめに、閲覧した資料は3件で、「1935年7月 新潟・佐渡旅行のスケッチ画連作」という藤田のスケッチを被写体とした紙焼きのカラー写真^(註18)と1935年の日記^(註19)および抜粋日記における1935年と1937年の該当箇所^(註20)がそれである。スケッチ画連作には20図が写真に収められており、紙に水彩絵具と墨を用いて直江津、佐渡、新潟、秋田、十和田湖などの各地の光景が描かれており、それぞれに地名と一部をのぞき日付も書き入れられている。日付だけ追うと、1935年7月15日から23日までとなる。次に、1935年の日記では、7月15日の東京から軽井沢へ向けての出発初日から、各日の行動や宿泊先、さらに人名と支払記録が記されている。ここでは時間上、秋田入りまでの閲覧にとどまったが、こまめな出費録が印象に残った。また、抜粋日記からは、1935年と1937年における関係箇所は限られた記述しか見出せなかった。

これらを総合すると、藤田の「裏日本」は、これらのスケッチと日記をもとにして書き起こされたものであることが明らかである。3件の資料と随筆の記述は、基本的に合致している。ただし、日記には途中日付のずれが1日あるようで、それは1935年7月20日付けの『新潟新聞』の記事「藤田画伯来島」によって確認することができた。この記事では、「仏国アルヂエ大学教授にして弁護士たるベルヂエ、ヴァシヨン氏を同伴十七日直江津より渡島、小木権座屋旅館に一泊、十八日相川、十九日両津に各一泊して退島」とあり、19日の佐渡両津での宿泊が日記では記載されていないことがその原因のようだ。「裏日本」では、両津は両津港の旧名である夷港としてだけ記される。また、同伴者のベルジュ・ヴァシヨンは、スケッチ画連作では「Berger Vachon」の名とともに、何度

(註17)

藤田嗣治「裏日本」『中央美術(復興)』第27号、1935年10月。その後、藤田嗣治『随筆集 地を泳ぐ』(書物展望社、1942年)に再録(同書は1984年に講談社から復刊)。なお、本文では復刊本を底本とする。

(註18)

藤田嗣治資料(FT03937)(1935年7月 新潟・佐渡旅行のスケッチ画連作)東京藝術大学所蔵。

(註19)

藤田嗣治資料(FT00511)('1935'[フジタ])東京藝術大学所蔵。

(註20)

藤田嗣治資料(FT00509)('抜粋[ママ]日記/1934/1935/1936/1937/1938 1939'[フジタ])東京藝術大学所蔵。

か画中にも登場している。

では、《佐渡小木港》に話を進めると、スケッチ画連作にほぼ同じ構図のスケッチが1図含まれており、このことにより藤田はこのスケッチをもとに2年後の1937年に油彩画を制作したことが判明した。両者を比較すると、構図の上では、スケッチは右方向の景色がより広い角度で描かれている。これは、油彩画が縦位置であるのに対し、スケッチが横位置の画面によるものだが、油彩画ではスケッチよりもむしろ左方向に少しだけ視点をずらして小木の港町の光景を切り取っている。眼下の建物は、スケッチどおりのものもあれば、一部は場所を変更しているようでもあり、また俯瞰の角度がスケッチよりわずかに低いことから、油彩画では多少なりとも画面上の編集がなされているようだ。なお、スケッチの画面右上には「HOTEL GONZAYA OGI SADO」の書き入れとともに、直江津から佐渡島への渡航記念スタンプと見られる押印もある。スタンプには、7月17日の日付をはじめ、「佐渡が島へは直江津から」「直江津代理店 古川回漕店」の文字および佐渡島へ向かう小舟の図が認められる。「裏日本」の記述にもあるように、これは藤田らが直江津港から小型船で出港し、沖合で大型船に乗り換えた際のものであろう。

さらに「裏日本」の記述をひろくと、「四時間の船路も無事、佐渡小木港へ着けば雨傘が岸にならんでいる。権藤屋の三階に上れば小木町は一目に入る、(中略)宿屋から写生する、主人が英作先生も柏亭先生もお出になったと肩越に言う。煩い程紅葉先生をふり廻す」^(註21)などがある。上記のスケッチ画連作や日記にもあるように、宿屋の権藤屋は権屋屋の誤りだが、ここからの写生がまさにこのスケッチであり、それが《佐渡小木港》を生み出したことになる。なお、宿屋は尾崎紅葉ゆかりの宿ともいわれる。

なお、『新津コレクション集』の図版からは、画面左下の書き込みとして、「佐渡小木港 嗣治 Foujita 1937」が認められ、またスケッチと同様に傘を差した人物が一人描かれている。そして、この図版からは判別しづらい画中の天候が、このスケッチから明らかとなった。スケッチでは、上空を黒い雨雲がおおい、沖合を中心に雨が強く降っている様子が描かれていたのだ。この油彩画が制作された1937年に銀座の日動画廊で開催された「藤田嗣治第4回近作展」(会期：6月22日～26日)に出品された油彩画の中に12号の《佐渡小木港の雨》がある^(註22)。そこから題名の「雨」の1字こそ異なるものの、新津記念館の《佐渡小木港》とは制作年やサイズから同一の作品と推測していたが、今回の閲覧で天候が確認できたことにより、やはりその推測は妥当だと考える。

(註21)
前掲、註17「隨筆集 地を泳ぐ」、242-243頁。

(註22)
前掲、註9『日本美術年鑑 昭和13年版』、74頁。

おわりに

新津記念館が所蔵する藤田嗣治の油彩画2点は、1937年の東京における展覧会に出品されただけでなく、新潟市内の旧新潟新聞社における藤田の個展にも出品された。その新聞社から程近い場所に居を構え、敷地内に洋館を建設中だった新津恒吉は、翌年に洋館の完成をひかえて館内に飾る美術品の入手を進めていた。そこに、衆目を集める藤田の個展が開催され、その年の二科展に出品された2点までもが特別出品されたのである。その内の1点《千人針》は、後に洋館の1階客間を飾ることになる三国久の《敵前上陸》と同様に、同年にはじまった日中戦争の時世を表す絵画として、おそらく新津

の好みに適ったのだらう。また、日本海に面し海上に佐渡島を望む出雲崎の地に生まれ育った新津には、《佐渡小木港》は「青年時代の思ひ出」として心に触れるものがあったのだらう。この藤田の個展でこれらの油彩画2点が新津恒吉によって購入され、そのおよそ5カ月後には完成したばかりの自身の洋館の壁面を飾ることになったのだ。

しかし、翌年に新津恒吉はこの世を去り、それからの日本はいよいよ戦時色を強めてやがて敗戦をむかえる。時代は大きく変転し、洋館は進駐軍によって接収される。新津記念館によると、接収されるにあたり、《千人針》は画題上不都合と考えて《佐渡小木港》や《敵前上陸》などとともに、人目につかぬ場所に移動したという。その後、接収はおおよそ10年におよび、その間に洋館は荒廃。やがて接収は解除されて洋館は返還されるが、それから長い年月が経過する中で、新津恒吉が所有した美術品もまたその存在を忘れられていったのだらう。平成に入ってついに財団法人が組織され、洋館は改修されて新たに新津記念館となり、再び日の目を見るようになる。それに伴い、所蔵品の整理が進むことで、それらの存在がごく限られた関係者の中ではあるが認識されることになったようだ。開館後の新津記念館では、館内で所蔵品を展示替えしながら公開してきたが、空間上の理由から主にそれは工芸品などに限定されてきた。つまり、藤田の2点の油彩画は展示されることなく、2008年の展覧会まで人目に触れずじっと存在していたことになる。

そして、2008年の1週間という短期間ながら、藤田の作品を含む新津恒吉の主要なコレクションがはじめて館外に出て外の空気と人々の目に触れた。しかしながら、その貴重な機会がごく限定的なものにとどまったといわざるをえない。刊行された『新津コレクション集』も展覧会後は館内での販売だという。いずれにせよ、作品は失われることなく今日まで存在していたのだ。まずは、この事実を喜ぼう。そして、願わくは再び目にする時の到来である。

謝辞

本文の執筆にあたり、作品を所蔵する公益財団法人新津記念館をはじめ、貴重な資料を提供いただいた公益財団法人平野政吉美術財団の原田久美子氏、さらに藤田嗣治資料の閲覧では東京藝術大学大学美術館の古田亮氏の協力を得ました。記して謝意を表します。

(新潟県立近代美術館 学芸課課長代理)